

故 平山玄先生を偲んで



西 口 章 雄

(大学商学部教授)

● 平山 玄氏略歴 ●

1907年5月18日生まれ
神戸商業大学研究科卒業後
1949年4月 同志社大学商学部助職授
1951年5月 同志社大学商学部教授
1978年3月 定年退職
1978年4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
1994年7月31日 5時 永眠 87歳

私と平山先生との最初の出会いは一九四八年(昭和二十三年)四月初め、岩倉の地、同志社経済専門学校における経済原論の教室においてでありました。日本経済も敗戦の荒廃から徐々に立ち直り、若い学生の胸にも新しい希望が芽生え始めた頃であります。先生の講義はワルラスの一般均衡論に基づく市場経済原論で、三重の田舎町の商業学校を卒業し、二年浪人してやっと合格できた私にとって、真に難解そのものでありましたが、新鮮な響きがしました。非常に厳しい姿勢で教鞭をふるわれておられた先生の若き頃のお姿が今でも目に浮かんできます。先生は当時四十歳の若さでした。一九四九年の学制改革に伴って同志社経専は新制の同志社大学商学部となり、私は経専を中退し、同志社大学教養学部に入學し、二年後の一九五一年四月に商学部三年に進學する事になりました。そして商学部平山ゼミ所属以来、公私にわたって先生の暖かいご指導の下で何とか今日までやってきました。この点は自他ともに認めるところであります。

学生時代にはゼミを通じて、客観的に物事を見る能力を磨くように厳しく訓練されましたが、世俗に超然としプライドと気骨に溢れた先生のお人柄からも、ゼミ生は多

大の影響を受けました。一九五三年三月卒業の折りに、ケインズの巨視的経済理論の学習を中心としたゼミにちなんで、先生はゼミ生一人一人に、「諸君は巨視的に物事をご覧になるんですね。こせこせしてたらあきまへんで」という先生直筆の言葉の入った湯飲み茶碗を手渡してくれました。我々は、再会の折りによくこの言葉を言い交わし、旧交を温めてきました。

先生はゼミ生一人一人によく気を配ってくださいました。時にはこんな先生に甘えて、特に私などは、奥様共々相談にのって頂いたり、大変なお世話も掛けたりしました。こういう訳で先生は、ゼミOBの間では親父のように敬愛され、「玄さん」と親しみ込めて呼ばれるようになってきました。

先生の七十歳の古稀記念パーティーには、奥様、光子さん、孝一君ともにご出席頂き、盛大な会がもてました。あの時の先生のお元気で喜びに満ちたお姿は今でも忘れられません。今や二度とこのような会を催し得ないのは残念でなりません。しかし、先生が我々の脳理に刻み込んで下さった教えと思えば、いつまでも我々の心に生き続けることでしょう。

先生安らかにやすみ下さい。

故 日下昭夫先生を偲んで



片山 寿昭

(大学文学部教授)

● 日下昭夫氏略歴 ●

1931年2月1日 生まれ
1953年3月 京都大学文学部卒業
1956年3月 京都大学大学院修了
1956年4月～1965年3月 京都大学文学部助手・講師
1965年4月 同志社大学文学部助手
1966年4月 同志社大学文学部専任講師
1968年4月 同志社大学文学部助教授
1972年4月 同志社大学文学部教授
1994年11月8日 6時8分 永眠 63歳

日下さんに始めてお会いしてからほぼ三十年、ときに同僚として、ときに友人として、同世代の、戦中・戦後の経験を共有するものとして、共に年をとってきた。日下さんは宮城県のご出身、私もしばらく青森県にいたこともあって、共に東北の文化・生活をなにかの土台とするところがあり、意外なときに親しみを感じたものであった。「ピョン」と「ピヤン」が示しているように、東北弁とフランス語の近さなどもよく話題になったものである。

ご専門の中世哲学では、こまかな特殊問題もさることながら、トマス・アクイナスの『神学大全』(『スンマ・テオロギカ』)の日本語訳への参加は、日下さんの重要なお仕事の一つであろう。「スンマ」は、私も院生時代、高田武四郎先生から一部分読み方を教わったこともあり、この点でも共通の話題に欠くことはなかった。日下さんの留学先はモントリオールであったが、その関係でも、古典語のギリシア語やラテン語はもちろん、フランス語にもきわめて堪能で、私をはじめ周辺へのよき影響は計り知れないものがある。

ただ一つ、酒豪でいらった日下さんと、

全くの下戸である私とは、内外の酒類に關しては、その差はどうにもならなかった。とくにビールについては底無しといってよく、一晩飲み続けてもけろりとしておられた。飲むほどに機嫌よく舌なめらかに、酒中真ありを地दैいつておられたのは、まことにうらやましい限りであった。

中世を代表する美術様式、ロマネスクに開眼の思いを覚えたのは、ヴェズレーやオータンを見たときであったが、この面でも日下さんは専門分野と密接にかかわっていることでもあり、ゴチック様式との対比など、独特の美術経験と芸術論をおうかがいしたものであった。これに加えてグレゴリアン・チャントや教会音楽についての深く深いご造詣もいろいろ聞かせていただく機会があった。

この度の日下さんの急逝はあまりにも突然のことであり、未だに信じられない思いでいっぱいである。図書館の横から、例のこやかなお顔をのぞかせておられるような気がしてならない。心からご冥福を祈る次第である。

故林 秋石先生を偲んで

山本茂樹

(華頂女子高等学校教諭)

昨年十月二日、林秋石先生が亡くなられた。その日は正に元総長・上野直蔵先生の十年祭、命日の日であった。

アメリカから先生の事を調べにきた研究家もいたので、深い悲しみが思い出を昇華させる前に、見聞した幾つかの事を書き留めておきたい。

・先生は一九五三年(五二歳)に日本に來られて以来、故国のアメリカに帰ろうとされなかった。それどころか六十年に帰化され日本人になられた。「林秋石」の「林」は、英語名 Lindley Williams Hubbell の Lin に由来し、日本の秋や石が好きなので「秋石」と付けられた。

・上野直蔵先生に同志社大学へ招かれ、また定年後他の大学への世話も受けたので、生涯、直蔵先生に信頼、敬愛、恩義を感じておられた。正月には必ず年始の挨拶に行かれ、直蔵先生の死後も奥様へ年始の花束を届けられた。直蔵先生も日本に身寄りがない林先生の面倒を、奥様に託して亡くなられた。

・葬儀は上野先生宅の一室をお借りし、神式で行われた。これは加茂の大田神社の御神楽を愛しておられたから。先生への誄

詞(よびことば)の一節。「雨風吹く中、又暑き夏、雪降る冬など近隣の者とて参拝の無い時も一人大田の神に参詣するなど心はいつも大田の神と共にあり、病の床に着きても十日になれば大田の御神楽の事を思い出し看病する者をなやます事もしばしばあり」

・文学は分析、説明するものでなく、感じとるものだと。先生の授業「シエイクスピア研究」でも「現代詩」でも、分析的理解ではなく、共感的理解を求められた。「現代詩」の授業で、詩の一行を説明するため、何枚もの資料を用意されたのも、深い感動を得るためだった。詩を明瞭な発音で朗読され、暫く沈黙されていたのも、深い感動を得るためだった。二七年にイェール新人詩人賞を受賞、クノッフから詩集を出された詩人の朗読である。その贅沢を知ったのは、卒業後何年かたってから。

・シエイクスピアの全作品を読まずに講義している学者、ダンテの「神曲」を英語から訳している学者を嫌っておられた。なにせ、ダンテの全作品を原書で五回読まれ、八歳の頃から毎日、八五年間、シエイクスピアの作品を読んでおられる先生だ。勿論、

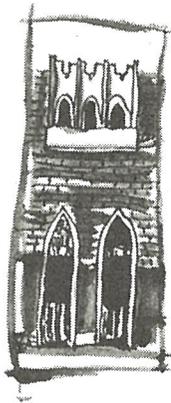


● 林 秋石氏略歴 ●

- 1901年 6月 3日 生まれ
- 1954年 4月 同志社大学文学部教授
同志社大学大学院文学研究科教授
- 1970年 4月 同志社大学大学院文学研究科博士課程指導教授
- 1970年 11月 定年退職
- 1994年 10月 2日 永眠 93歳

シエイクスピアの主な作品は、一字一句すべて頭にはいつていた。ドイツ、ギリシャ、ラテン、イタリア、フランス語を習得されていた。

九三歳の生涯を閉じられた朝、御遺体の脚をお擦りしていた。真つすぐに伸ばせなくなつた脚を。それは現行曲約二四〇曲中一八六番の能、のべ四二七曲の能を、正座し凝視されて観能された結果であつた。能を非常に愛し、芸術へ全人生を捧げられた先生への、芸術からの仕打ちであつた。



故 別所秀子先生を偲んで



安藤孝雄

(女子大学教授)

● 別所秀子氏略歴 ●

1903年11月9日生まれ
1928年3月同志社女学校専門学部家政科卒業
1949年4月同志社女子大学助教授
1951年4月同志社女子大学教授
この間、家政学部部長などを歴任
1974年3月定年退職
1974年4月同志社大学名誉教授の称号を受く
1994年10月13日 8時55分 永眠 90歳

別所秀子先生に初めてお会いしたのは一九五八年頃、恩師を介してのことであった。当時、世の中へ出て間もなかった私には女性の大学教授というのは眩しい程の存在で、温顔と行き届いたお心遣いに敬愛の念を深くしていった。これが縁となって後年同志社女子大学に奉職することになり、御定年までの五年間先生の研究室で薫陶を受け、公私ともに御厚情をいただいた。先生は折にふれ遠い彼方を見るようなまなざしで過ぎた日々のことを話された。それは単なる懐しさだけではなく、楽し気で誇りさえ感じられた。

先生は一九〇三（明治三六）年京都市内のお生れで、その後京都府下丹後へ行かれたが一九一五（大正四）年同志社女学校普通学部（現女子中高）に十一歳余の年足らずで入学された。幼くして御両親を亡くし、家族が離散していた先生にとっては旧平安寮での生活も含めこの五年間はまことに楽しいものであったらしく、級友との賑やかな語らい、歌が好きで勉強そっちのので讚美歌ばかり歌っていたこと、ときどき礼拝をすっぱかしてはデントン先生に見つかって追っかけられ、御所まで逃げ込んだこと

——デントン先生も御所までは追っかけて来られなかったそうである。また、別所先生のこのやんちゃな気質は私がお目にかかってからも形を変えて随所に発揮されていたように思う——などの話になると声が弾んでおられた。この女子部での影響は大きく、在校中に受洗、生涯同志社との深い関わりをもたれることになる。

卒業後は東京の女子専門学校への進学をお考えになったが故あって丹後に帰り、ミシンの勉強などしておられた。やがて若くして結婚、須磨にお住いになる。終生にわたる神戸住いの始まりである。或るとき夫君が御同伴の客人を先生は手料理でもてなされた。食事の後ちよつと出てくる、と言って夫君が客人とともに外出されたが、後日その事情が夫君からではなく、他のルートで先生のお耳に入った。それは先生の料理の出来が余り結構なものではなかったのだ、そのお詫びの意味で夫君が外でもう一度客人に御馳走されたのである。自分は料理を知っているつもりなのに実際は何もできない、そのことを知らなかった、それに気付いた先生は発奮し、もう一度勉強したいということだ夫君の同意を得て同志社女

学校専門学部（後、同志社女子専門学校）に進まれる。当時、既婚者の入学は認められていなかったが、在学中に結婚した学生が居るということで、松田道校長の決断により許可されたという。直通電車が走る現在でも須磨から通うのは大変であるが、当時は汽車でそれも本数が少なく、毎朝須磨駅五時二〇分発の列車での通学であった。

一九二八（昭和三）年に専門学部家政科を卒業後、その頃神戸市内の御自宅の近くにあった神戸女学院女学部家事数学専門学校家政科に産休の代理教員として、一九三四（昭和九）年より専任教員として教壇に立たれた。母校同志社女子専門学校に迎えられたのは一九四三（昭和一八）年のことである。

この間、一九三〇（昭和五）年頃デパートで大阪市立生活科学研究所主催の食物に関する展覧会があり、ここで同研究所の下田吉人博士（後、大阪女子学園短期大学長）に邂逅される。この会場で、調理でこのようにしたら何故こうなるのか、理論的に説明して欲しいという先生の質問に、調理のことをこのように考える女性は初めてだ、うちへ来て勉強しませんか、と下田博士が

応じられ、以後教職の傍ら生活科学研究所での勉強が始まり、その成果がラジオで放送されたりした。調理を単なる技術でなく、科学的に捉え解明してゆくという調理科学の概念が今から六十余年前、若き日の先生の中に芽生えていたのである。この考え方は先生はじめ、下田吉人、茶珍俊夫博士らによって醸成され、やがて一九六八年全国規模で調理科学研究会の発足となり、一九八五年日本調理科学会へと発展してゆく。また、他大学に先駆けて同志社女子大学に調理科学という授業科目と研究室を設けられた。このように先生は調理を学問としてのレベルにまで高めた先駆者の一人であった。

一九六七年学芸学部から家政学科が独立して家政学部が設置されるとその初代学部長に就任、翌一九六八年大学院家政学研究所設置とともに研究科長も兼任される。当時、夫君——先生は他人には夫君のことをうちのおっちゃんと呼ばれ、家庭ではごく普通の主婦で夫君に頼り切っておられた。自分の仕事のため家庭を犠牲にしていることをいつも気にして、おっちゃんはね、理解とか協力というよりも辛捧しているの

よ、と申し訳なさそうな顔をされた——を亡くされて日も浅い頃で、静かに悲しみに浸りたいお気持ちであった。それにも拘らず重職に任ぜられたことについては、忙しくすることで一時でも悲しみを忘れさせようという越智文雄学長の御配慮、と感謝しておられた。

先にも触れたが先生は幼くして御両親を亡くされただけに、重荷を背負った人、悲しみや苦しみをもった人にはすっと手を差し伸べられた。それ故に多くの卒業生が先生を慕っていた。常々、自分はお祈りすること、讚美歌を歌うことしかできない、と仰っていたが、神を敬い同志社を愛した方であった。

故 窪田哲三郎さんを偲んで



木 下 良

前 国学院大学教授/
元 同志社女子中・高等学校教諭

● 窪田哲三郎氏略歴 ●

1930年2月5日生まれ
1954年3月 京都大学文学部卒業
1954年4月～1994年7月
依願退職されるまで40年間の永きにわたり、同志社女子
中学高等学校教諭として勤務、同校の教育に尽力された。
1994年12月2日 3時 永眠 64歳

去る一二月二日、前同志社女子中・高等学校教諭窪田哲三郎さんが不帰の客となった。一〇年近い闘病の後、定年を待たず退職してから半年足らずのことであった。入社が一九五四年四月のことであるから、四〇年余を同志社に奉職したことになる。彼は人格円満で自他に誠実な人であったから、同僚から尊敬され生徒からは親しまれていた。学校や法人関係の役職にも多くついていたから彼を知る人は多いであろう。ここでは窪田君と呼ばせて頂き、私だけの思い出に浸ることを許して頂きたい。私は復員後高等学校に再入学するなどして、普通の人よりは数年遅れて旧制最後の学年に京都大学文学部史学科に入学し地理学を専攻したが、私が二回生になった一九五一年に窪田君は新制の第一期生として学部に入ってきた。年齢は八つも違うが二年間机を並べて学び、一緒に卒業する筈であったが、窪田君は卒業論文を提出せず留年した。

窪田君の論文は、別子銅山をフィールドにして鉱山集落や精練業の立地の変遷を取り扱ったもので、演習での報告でその優れた内容を知っていたので、当然提出するものと思っていた。私自身は締切前夜を徹して明け方近くに仕上げ、十分に見なおす暇もなく提出したものであったが、未だ窪田君が出していないと聞いて彼の下宿を訪ね、一応は出来上がっている論文を提出するよう極力勧めたが、彼自身は不十分と感じたらしく、どうしても提出しようとしなかった。ここにも、窪田君の自らに厳しく律する性格が現われている。

私は卒業と同時に女子中高に勤めることになった。同校には先輩の木地節郎さん(商学部名誉教授)が居て、二人で地理関係の科目を担当したのであるが、翌一九五四年に木地さんが商学部へ転出されたので、その後任として窪田君に来てもらうことになったものである。思えば、彼が前年に卒論を提出していれば、女子中高に来ることはなかった筈で、さらには、女子中高で教鞭をとっておられた令夫人の百合子さんとも会うことはなかったのではなからうか。不思議な縁を作ることになった窪田君の論文は、その後の検討を加えて「銅精練工業の立地の変遷」と題して、権威ある人文地理学会の機関誌『人文地理』一五巻一号(一九六三年)の巻頭を飾っている。

以来、私が同志社を退職する一九七三年

春までの一九年間、最も親しい同僚として机を並べることになった。彼は少年時代に天文学に興味を持ち、昆虫採集にも熱中した。また長じては登山が好きで独身時代は毎週末のように山に入っていたようである。私も野外に出るのは好きで、女子中高でも暫らく「自然に親しむクラブ」の顧問をしていたから、窪田君にもよく手伝ってもらった。クラブの備品にアメリカ軍放出の携帯テントと寝袋があつたが、これらは専ら窪田君が愛用していた。大杉谷で道に迷い、たまたま途中で一緒になった人と一つ寝袋に納まって夜を過ごしたこともあつたと言う。

学校の行事としての登山や旅行には、あまり一緒になることがなかったのは、二人共にそれぞれ別の計画の立案者になることが多かったからであろう。窪田君と二人だけの山行きでは、五月の連休を利用しての一泊二日の比良山縦走が印象に残っている。山歩きには氷砂糖など甘味品を持っていくことが常識だが、何時もは生徒が必ず甘いものを持ってくるので、そのことに思及ばなかったのだろうが、この時は何も持っていなかった。何時もは甘いものにはあ

まり縁のない二人だが、無性に欲しかったことを思い出す。

また、二人だけの旅行は一九六一年夏に弘前で開催された全国地理教育研究会に参加して、その後北海道を廻ったことである。未だようやく知られるようになったばかりの知床半島を旅し、当時は西岸は観光船が就航していなかったため、宇登呂から集魚船に便乗させてもらって知床岬まで往復したが、早朝に出て岬まで直行して帰りに各網場に寄って廻るので、帰りは夕刻になるという満一日がかりの船旅であつた。

翌日は半島を横断して羅臼に出た。現在は国道が開通しているが、当時は全くの山道であつた。私は峠ですっかりへばつたが、窪田君は羅臼岳（一六六一メートル）まで登って来るという。仕方なく私はそこで二時間程待たせようか、しかし、そこから羅臼までの下りでは窪田君が膝を痛めて、羅臼では二泊して休養することになった。

窪田君が同僚の永島百合子さんと結婚することについては私に相談に来た。木地さんに媒酌をお願いすることになり、木地さんのお宅まで一緒に付いて行った。結婚式披露宴の司会は私の務めだったが、今のよ

うに大規模なものでなかったのは、不器用な私にとっては幸いだった。その時以来、窪田君から窪田さんになった。窪田さんの御冥福を祈る。

故 小川光暘先生を偲んで

笠井昌昭

(大学文学部教授)

小川光暘先生に初めてお会いしたのは、私が同志社大学に入学した昭和二十八年のことであった。五月のことだったと思う。そのころ文化学科の研究室は現在学生会館のある上立売にあった。そこで開かれた文化史の教員と学生たちの懇話会で、石田一良先生からまだ助手であった小川先生のご紹介があり、御父君が飛鳥園の小川晴暘と伺って、大変びっくりもし、奇遇にさえも感じた。それというのも、山梨県の片田舎に生を享けた私が、郷里に近い東京の大学を見向きもせずにはるばる関西の地に大学を選んだのは、中学生のころはじめて見た飛鳥園主・小川晴暘撮影の仏像写真集によって、仏像彫刻への興味をかき立てられたからにはかならない。そしてその会合を契機に結成された美術史研究会を通じて、以後私は小川先生の指導を受け、やがて飛鳥園にも出入りさせていただくようになった。翌年私が二回生になったときには、小川先生も助手から専任講師に進まれ、史料講読や日本美術史を担当された。私を含めて私の同級生たちは小川先生の最初の受講生となったのである。

昭和二〇年代の終わりから三〇年代の半

ばにかけては、日本の美術史学が一つの活気に溢れた時代であった。家永三郎氏と中村二柄氏の間で「美術史の自律と他律」の問題が争われ、また彫刻史の上では、「白鳳時代」の肯定・否定論が薬師寺金堂の薬師如来の作期に関連してやかましく論じられており、その渦の中で私も卒業論文のテーマとして「白鳳彫刻論」にとりくんだ。また、後に私がその研究に携わることになった信貴山縁起絵巻について『佛教芸術』が特集を組んだのもそのころである。

小川先生を囲んで、美術史の自律や他律の問題を熱く議論しながら、ヴェルフィンやドヴォルシャックやリーグル、そしてヴォーリンガーの美術史理論を学んだのも、学部で二回生から四回生にかけての時期であった。小川先生を通じて、家永さんと論争していた中村二柄先生をご紹介いただき、三回生の時移り住んだ若王子の下宿がこれまた中村二柄先生のお宅に近かったこともあって、しばしが二柄先生のお宅にもお邪魔するようになった。

人も知るように、中村二柄先生はヴェルフィン学者である。ところが、ドヴォルシャックを日本で紹介された中村茂夫先生



●小川光陽氏略歴●

1926年1月3日 生まれ
1950年3月 同志社大学文学部卒業
1950年4月 奈良県立奈良高等学校教諭
1951年4月 同志社大学文学部助手
1954年4月 同志社大学文学部専任講師
1959年4月 同志社大学文学部助教授
1965年4月 同志社大学文学部教授
1995年1月12日 1時15分 永眠 69歳

が、これまた近くにおられて、小川先生からご紹介いただいた。両先生とも普段はこやかだが、こと学問と面となると、ドヴォルシャックとヴェルフリンは衝突しかねない。どういものか、ただ独り酒の飲めない私が、酒好きな両中村と小川のお三人の座にお相伴させていただくことが何回もあった。酒が進むにつれてヴェルフリンとドヴォルシャックは衝突する。お二人の議論の間に挟まって、若い未熟な私はただおろおろしている。小川先生は酔ったような振りをしてただにやにやと議論を聞き流しながら、間に挟まって困っている私を助けようともして下さらない。しかし今にして思えば、これは大変な教育の場であった。

若いころの先生は、シルクロードをオートバイと自動車とで横断することを長いこと夢見ておられた。私たちが学部 of 四回生のころから大学院の時代にかけて、「おまえたち、自動車の免許を取れ」とよくいわれたものだ。今と違って昭和三〇年代の前半のことだ。そのころは海外へ出掛けるなど今のような簡単なことではない。ましてそのころのシルクロードは、夢のまた夢だった。「砂漠を走るのに運転免許などいるのか

しら」と学生たちはあまり相手にしなかったが、先生はその夢を長いこと持ち続けられた。そしてそのときほんとうに運転免許を取ったのは結局先生おひとりだったのである。